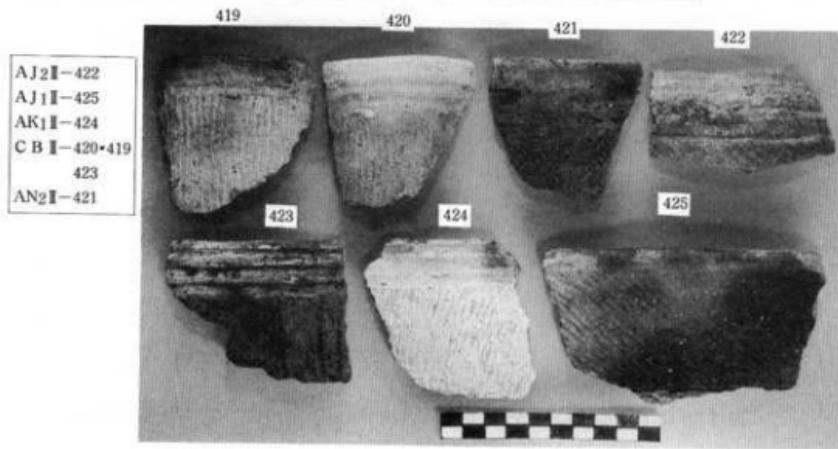
CA II - 417
AK2II - 418

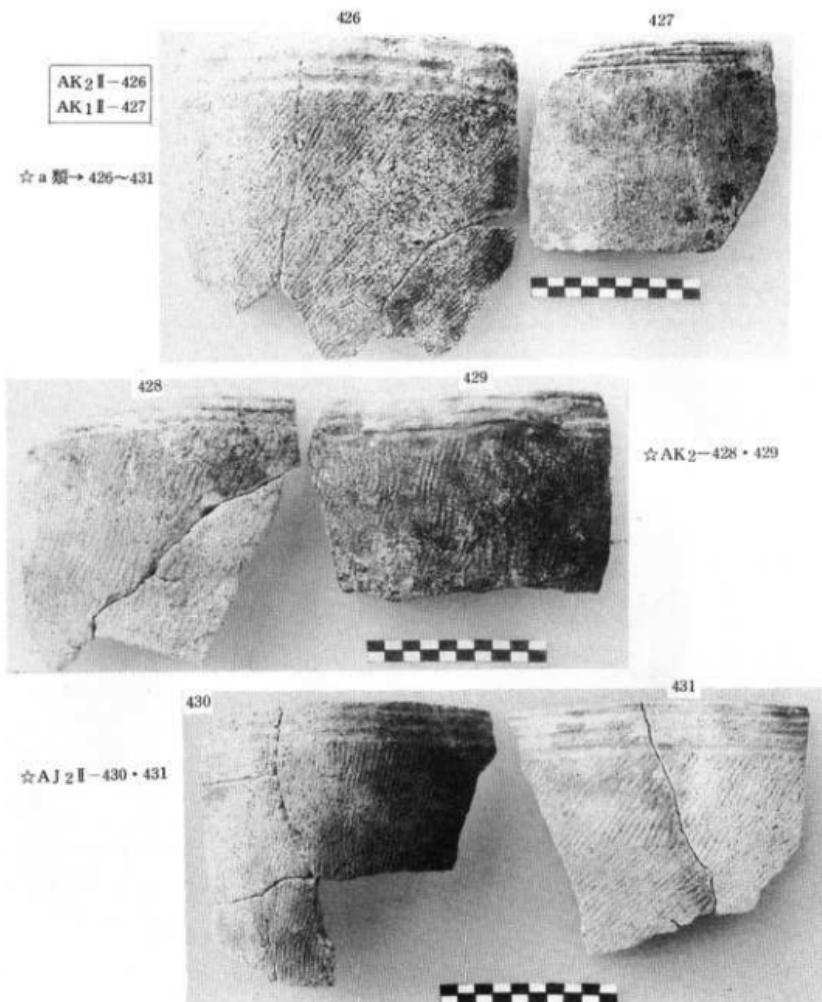
〔第8群土器〕 - 417・418, 419～425

☆ ここに掲げた、上・下段のものは、すべて第8群とした大洞C2式粗製深鉢形土器である。

- ・ いずれも頸部に平行沈線文のあるもので大型の土器である。

〔第8群土器〕（晩期の土器）

P・L.36



〔第8群土器〕 426・427, 428・429, 430・431

☆ ここに掲げたものも、第8群とした大洞C2式の粗製深鉢形土器である。

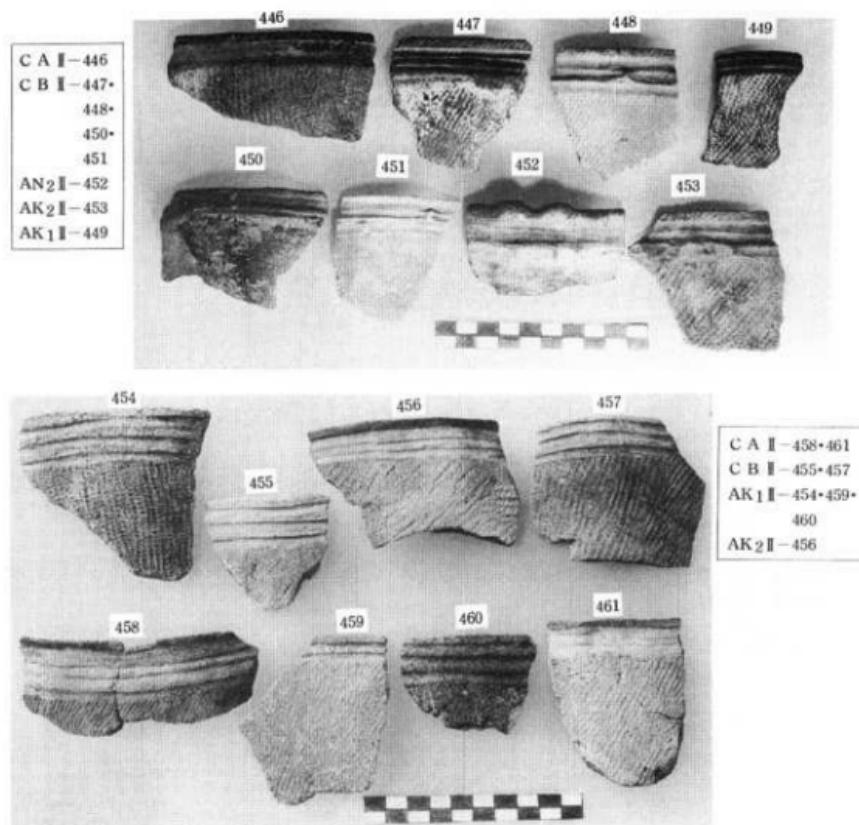
- いずれも口頸部に3条の平行沈線文が施文されるもので、胸部には、斜縦文が施文されたものが多い。

☆ a類→（432～434, 437）



〔第8群土器〕 - 432～439, 440～445

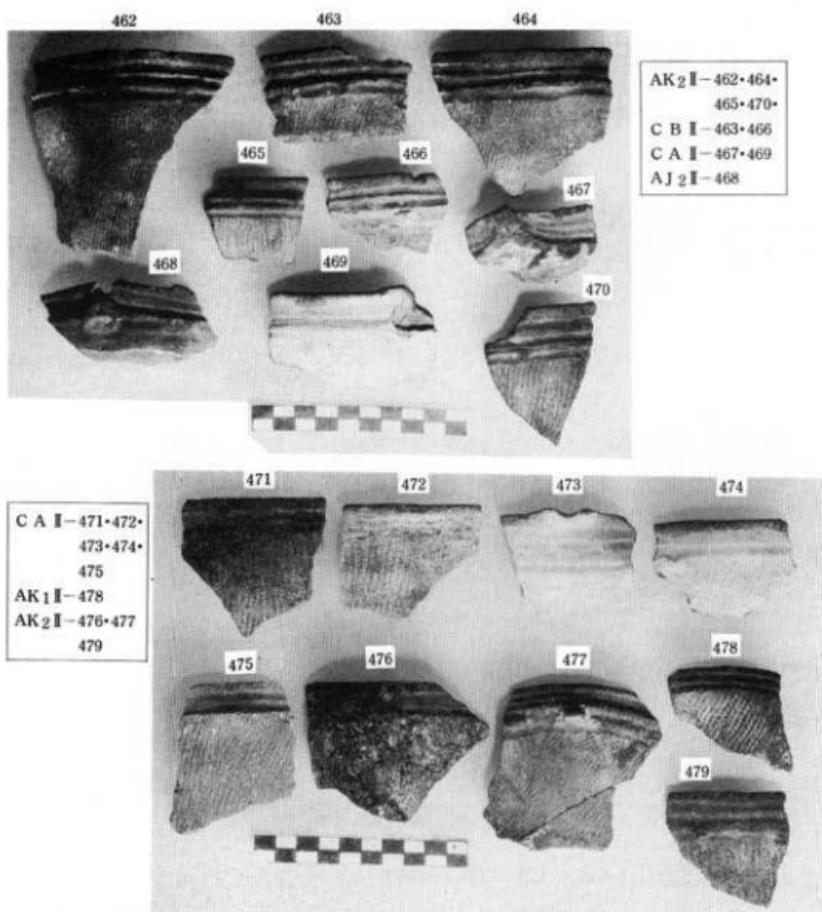
- ☆ ここに掲げたものは、上段の（432～434, 437～439）は第8群とした大洞C2式深鉢形、（435）は浅鉢形底部、（436）は片口鉢形土器である。
- また、下段の（440～445）は、大洞C2式の鉢形土器であろう。
- ・ 上・下段とも粗製土器で、斜縄文、燃糸文、条痕文等が胴部に施文される。



〔第8・9群土器〕—446～453, 454～461

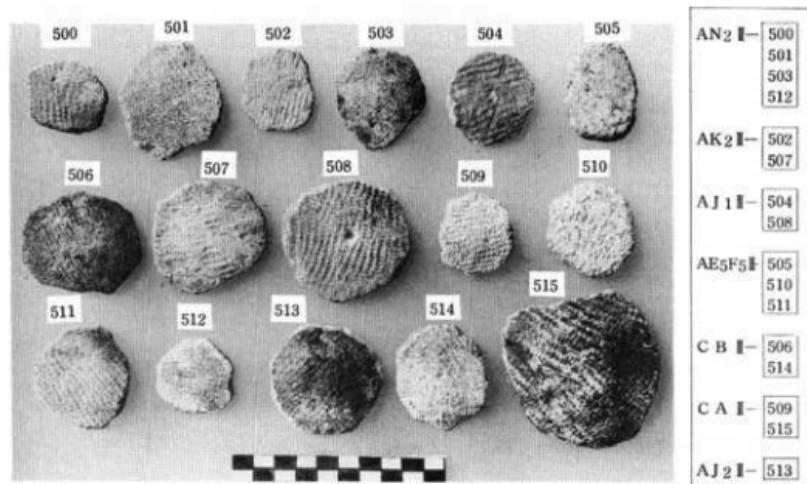
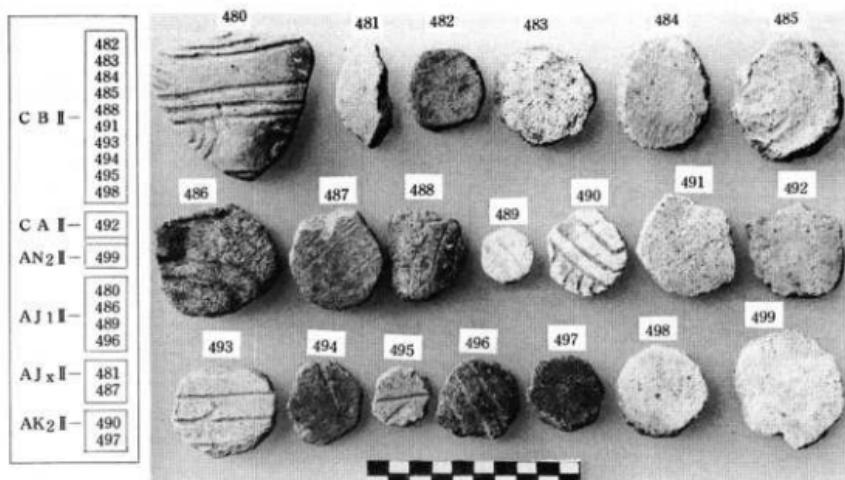
☆ ここに掲げたものは、第8群・第9群とした大洞C2式、大洞A式粗製鉢形土器である。

- このうち、上段の（451）は、小突起の形態から大洞A式、（452）は大洞C2式と思われる。
- また、下段の（454～461）は大洞C2式鉢形土器である。このうち、上段の（446～450・453）は、口縁上端にも繩文が施文されるもので一つのタイプである。このタイプを第9群（大洞A式）として分類したがどうであろうか先学のご教示を俟う。



〔第9群土器〕—462～470, 471～479

- ☆ ここに掲げたものは、第9群（大洞A式）土器として分類したが、どうであろうか？
- このうち、（468・469）は、口縁と頸部の形態から分類した。（468）二叉山型の口縁突起は、当遺跡の大洞C 2式では出土がないものである。（469）は、胸部に入り組み工字文があるものようである。
- 他のものは上・下段とも、口縁上端に楕文のあるもので、P・L38で述べたとおり、一応第9群（大洞A式）とした。

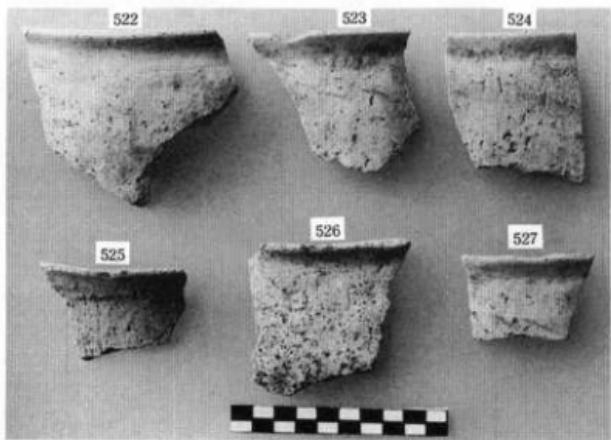


〔円盤状土製品〕—480～499, 500～515

ここに掲げたものは、すべて円盤状土製品である。上段は、後期の土器片を活用したものである。また下段は、晚期の土器片を利用したものであるが、貫通孔のあるものは出土しなかった。未貫通のものは、わずか2このみである。



C A II - 516
 C B II - 517
 AJ 1 II - 518
 AK₂ II - 519
 AK 1 II - 520
 AJ 1 II - 521

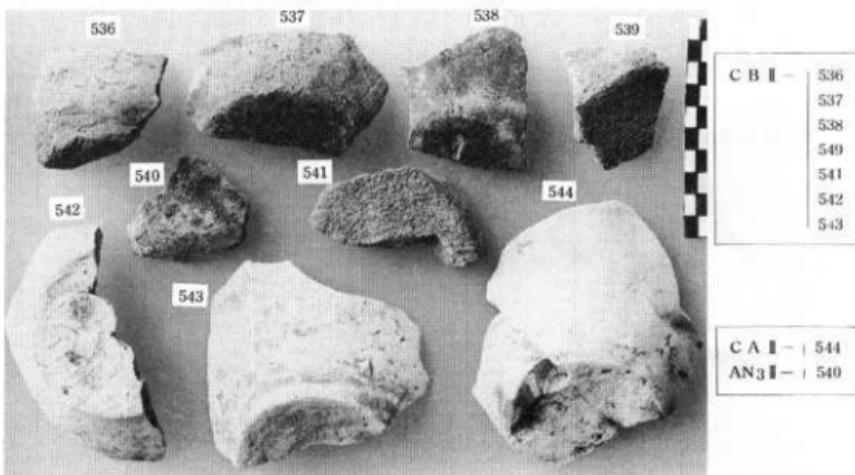
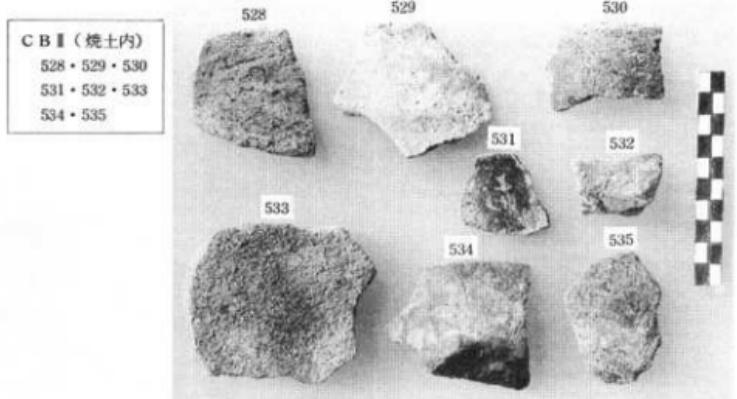


AJ 1 II - 522
 C B II - 523・524
 527
 C A II - 525
 AK 1 II - 526

〔土師器一环形・甕形〕 - 516～521, 522～527

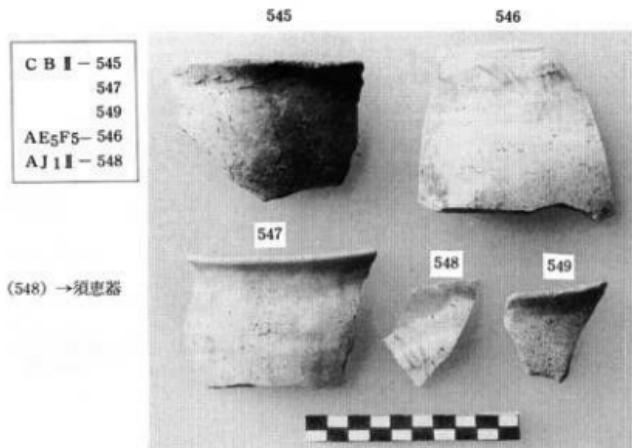
ここに掲げたものは、上段が环形土師器、下段が甕形土師器である。

- 上段のものは、ロクロの使用による糸切り痕を見せるものもあり、下段のものは、へら削り痕が認められ、口頸部の外反に齊一性を認めるものである。
- いずれも、その器形から「東北々部の土師器型式」第二型式に型式分類されるものである。

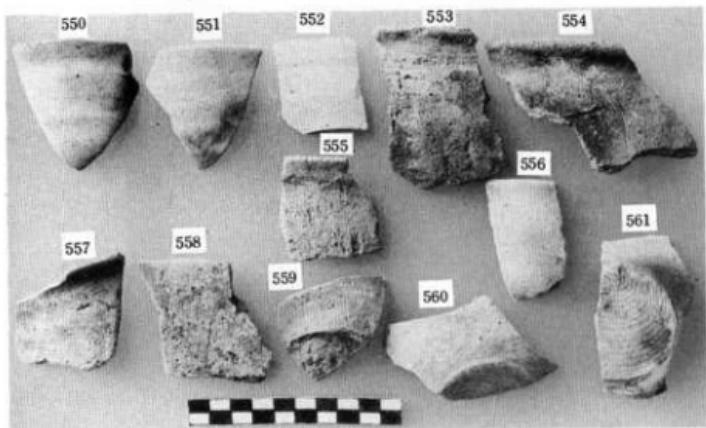


〔2号住居址出土、土師器、および底部〕

- ☆ ここに掲げたもののうち、上段は2号住居址地床炉内より出土したものである。甕形土師器およびその底部であるが、住居址の年代を知る手がかりになるものである。
- 下段は、甕形土師器の底部各種であるが、上段と比較して年代的には差はないものと考えられる。



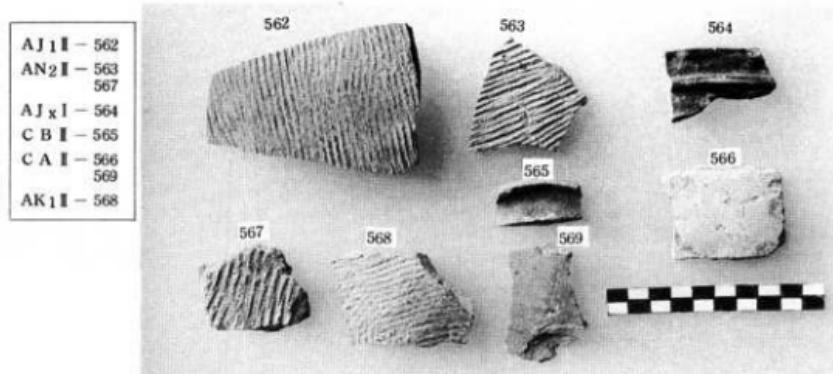
〔土師器一壺形・壺形〕



〔土師器一壺形・壺形・須恵器一壺形〕

(556) → 須恵器

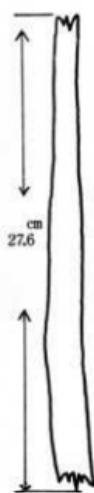
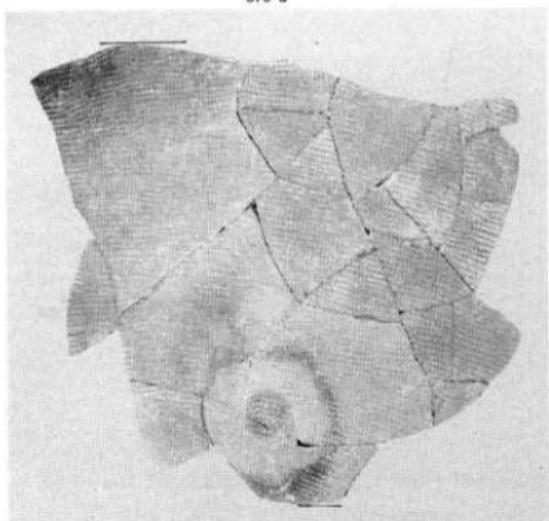
C B II - 550・551・552・553 554
C A II - 555・556
C B II - 557・558・561
A J 1 II - 559・560



〔須恵器・土師器・陶器〕

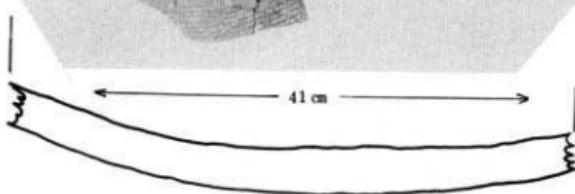
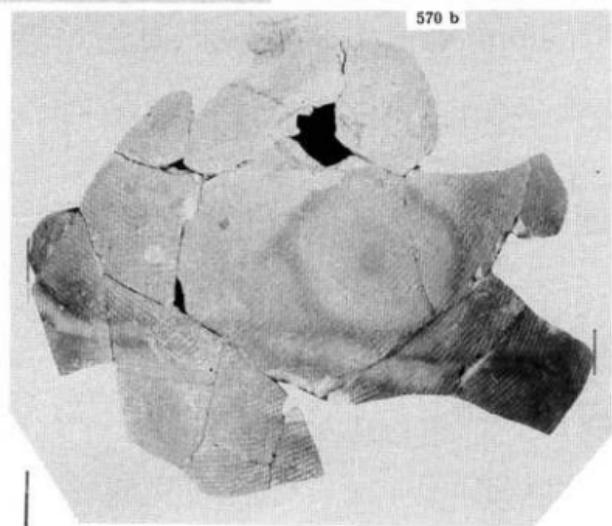
☆ ここに掲げたもののうち、(562・563・565・567～569)は須恵器であるが(562・563・567・568)は甕形、(565・569)は長頸壺、(564)は地方窯で焼かれたと思われる陶器片、(566)は土師器片であった。

570 a

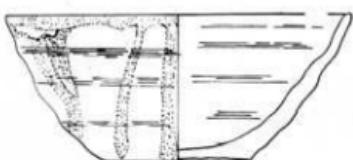


☆ C B - E 1 II - 570 a
570 b

570 b



571



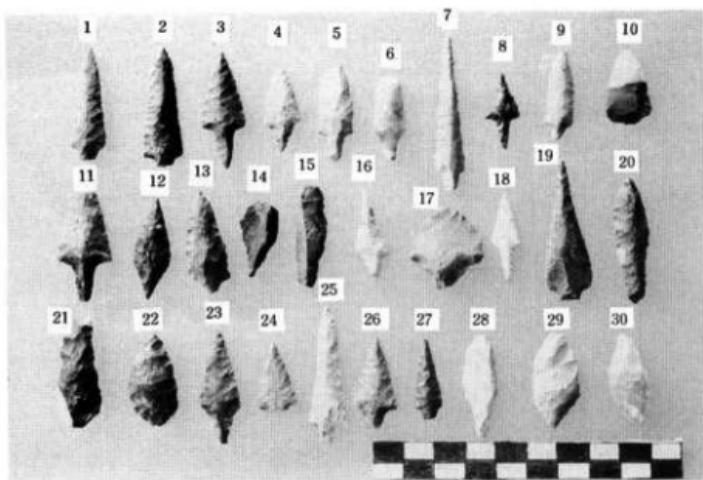
AJ1-I



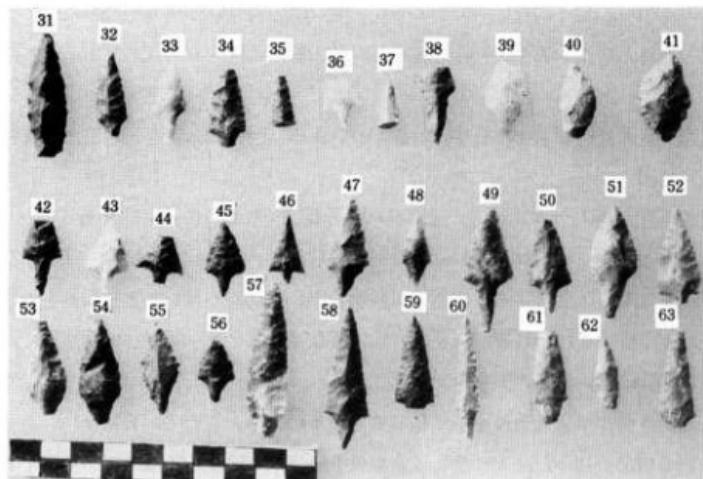
〔环形須恵器〕—571（図上復原）

- ☆ ここに掲げたものは、A地区J1グリットのⅡ層より出土した、环形須恵器である。
 - ☆ 出土層が既述のとおりⅡ層の黒土層であるが、このⅡ層は再堆積層であって、この層から既述してきた晩期、後期、前・中期の土器群が出土している。したがって混入と考えるのが妥当であろう。
 - このものは、約 $\frac{1}{3}$ 現存のものであるが、カーブの計算によって復原したものである。写真で見るとおり、火だすき痕を残すもので、器形は、前田野目窯址出土のものと同様である。
 - なお、底面に回転糸切り痕を認めるものである。色調は赤黄色、内面は灰青色を呈する。
- 〔大形甕形須恵器〕—570（一部掲示）→〔掲示したものの他に60片あり〕
- ☆ このP・L45—(570@⑫)は他に60片の破片とともに、C地区BグリットE1区Ⅱ層下、すなわち、2号住居址床面（第11図参照）上に貼り付いて出土したものである。またその覆土すなわちⅡ層より出土したもの（掲示せず—60片）に分かれて検出した。これらの破片は、すべて接着できるものである。
 - この須恵器片は、大形の甕形土器の底面より胴下半のもので、日輪状に、ささえられたと見られる痕跡がある。（570⑫）は底部付近、（570a）は、胴部下半のものである。このものは、2号住居址の年代を決定できる出土状況であった。）

〔その 1〕



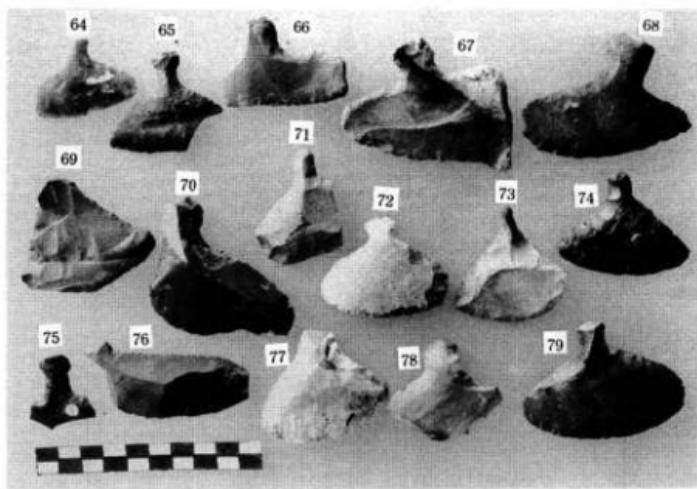
〔その 2〕



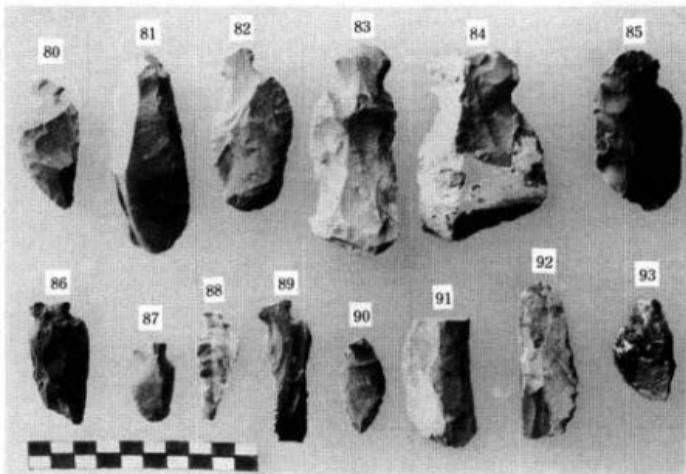
〔削 器〕 (横形・縦形)

S P · L 2

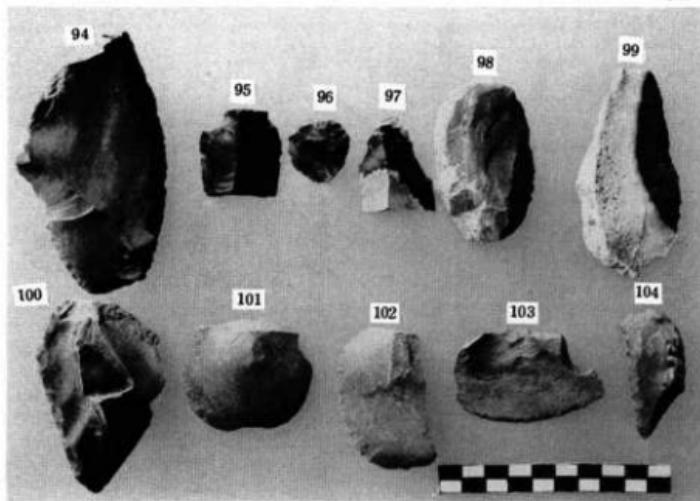
〔その 1〕



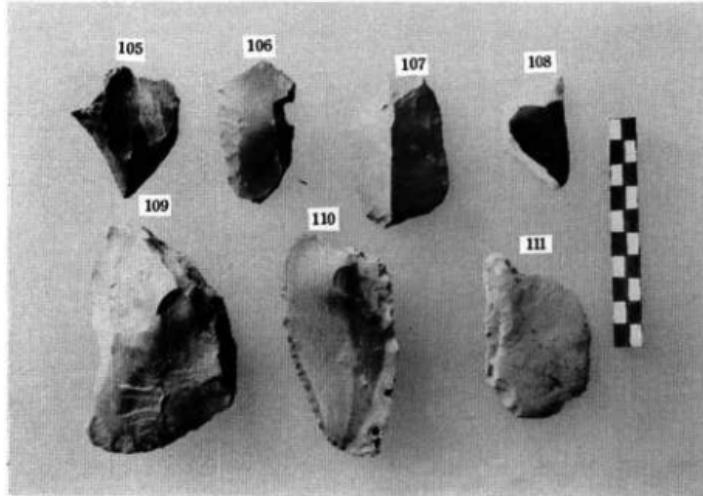
〔その 2〕



〔その 1〕



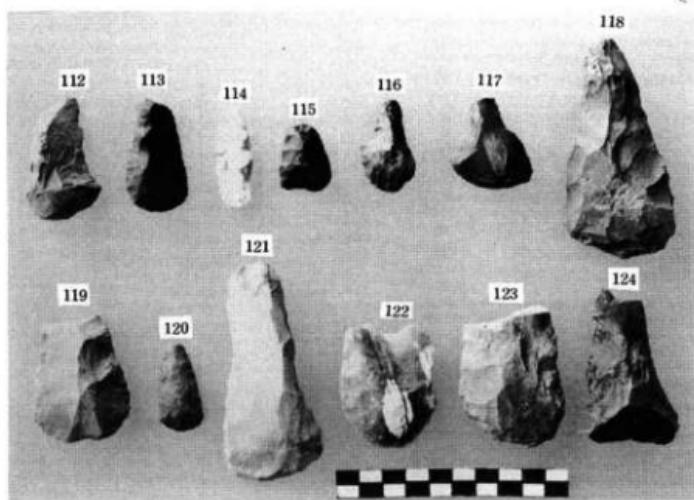
〔その 2〕



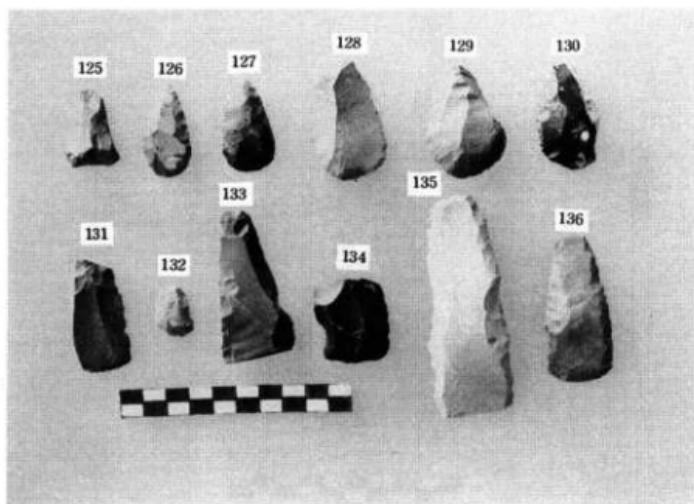
〔搔 器〕 (定形～不定形)

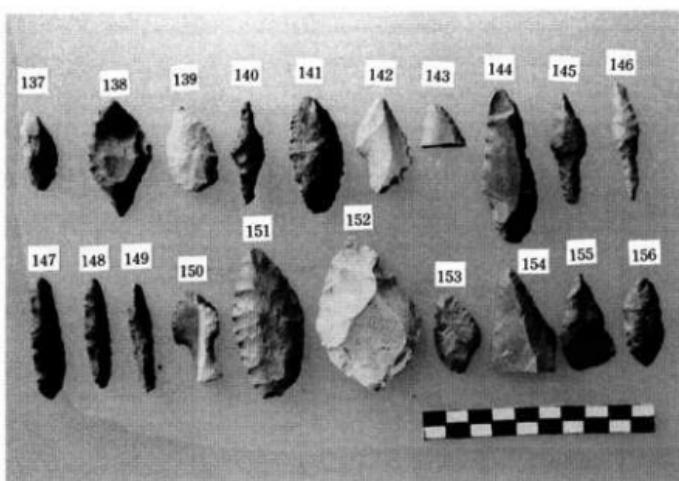
S P · L 4

〔その 1〕

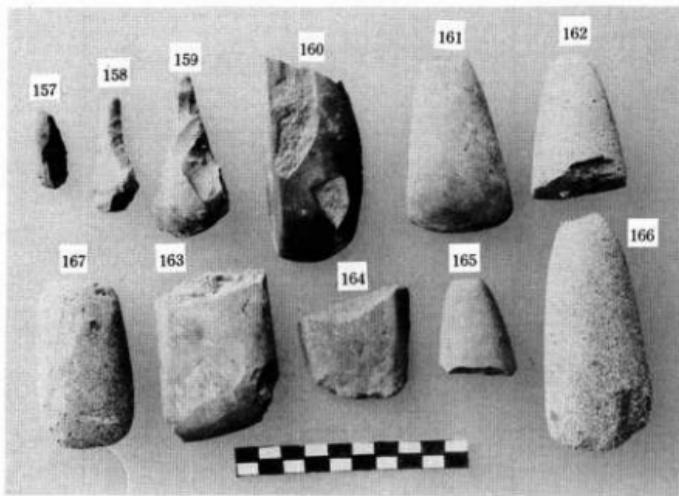


〔その 2〕



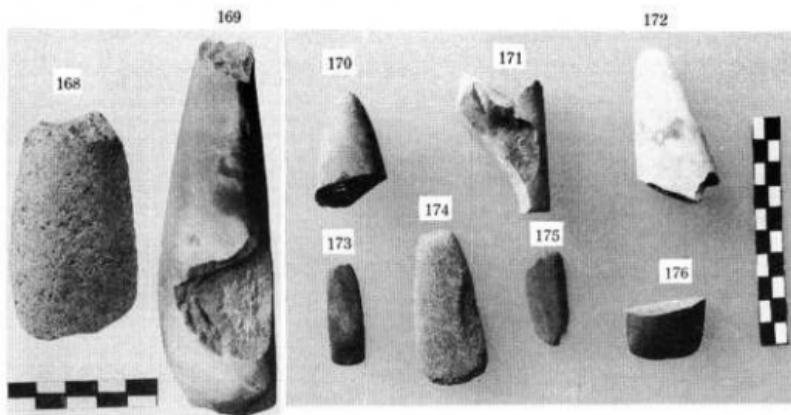


〔石 錐・石 矛〕

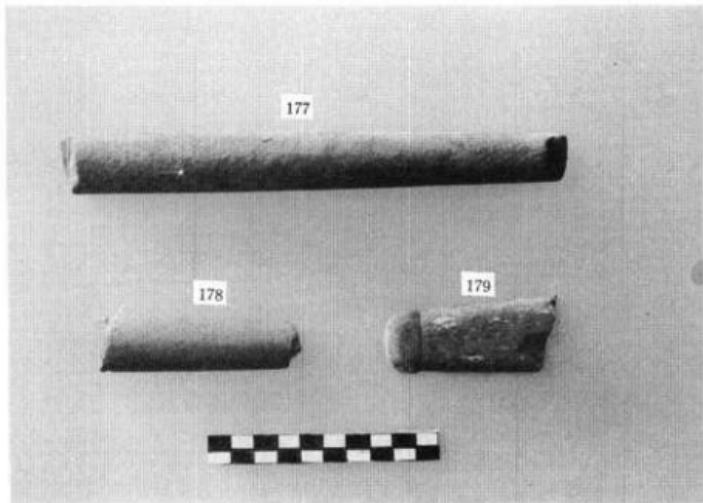


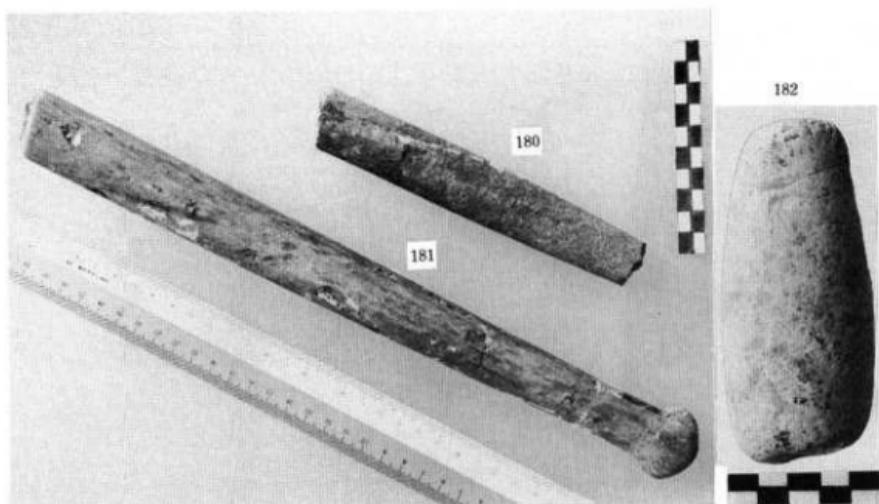
〔石 砍〕

S P • L 6

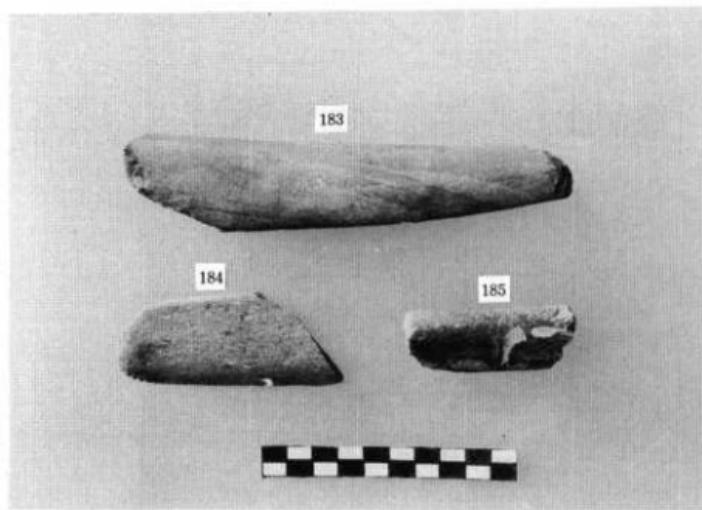


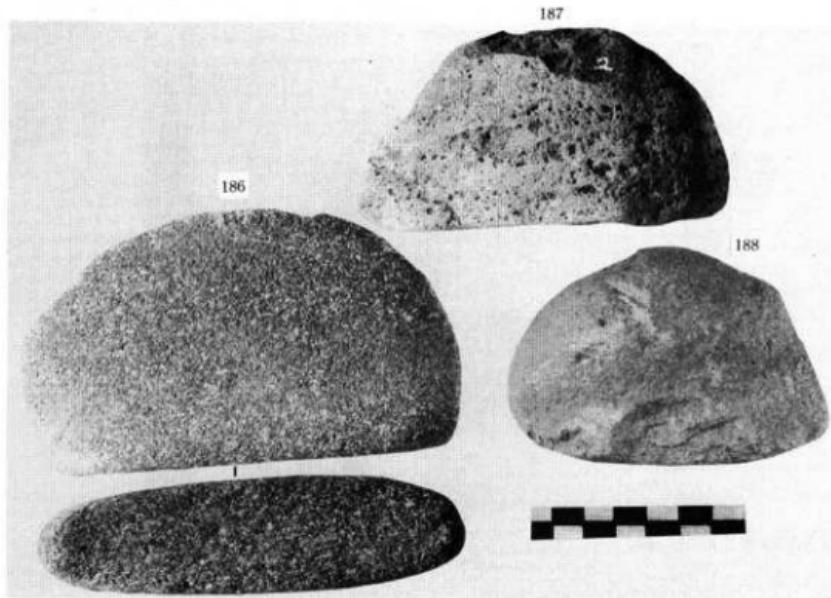
〔石 棒〕



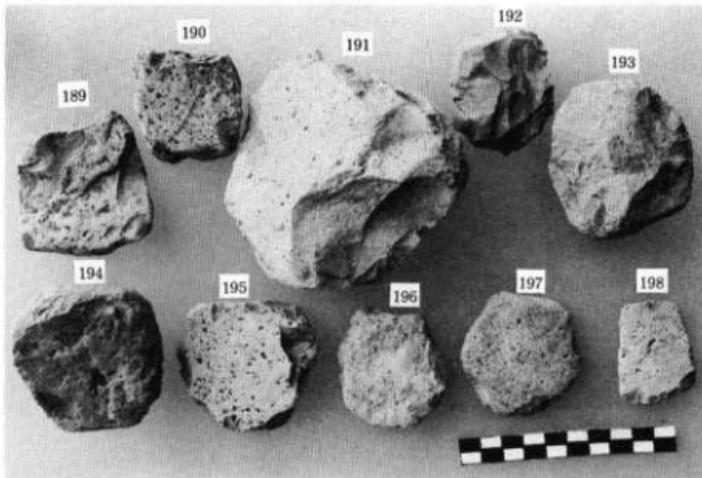


〔石 刀〕





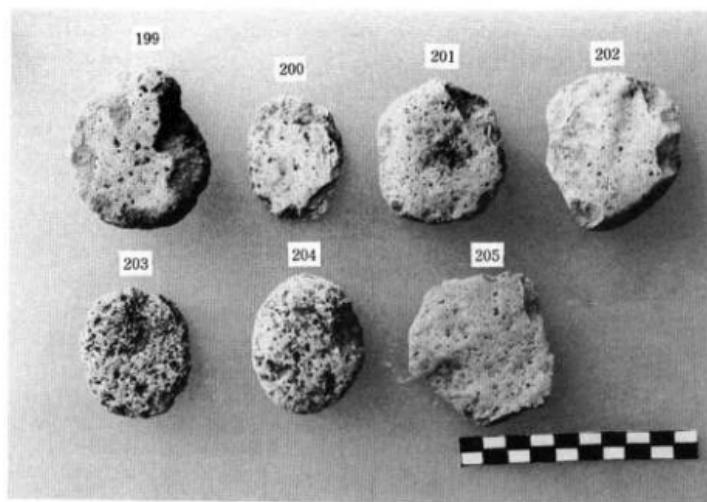
〔打欠きのある扁平石器〕 → (梯形・方形)



〔打欠きのある扁平石器〕 → 〔楕円形〕

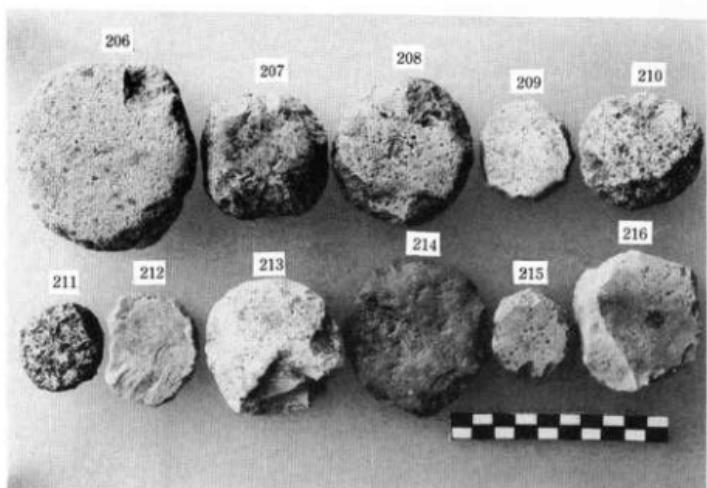
S P · L 9

〔その 2〕



〔打欠きのある扁平石器〕 → 〔円形〕

〔その 3〕



〔磨痕のある扁平石器〕

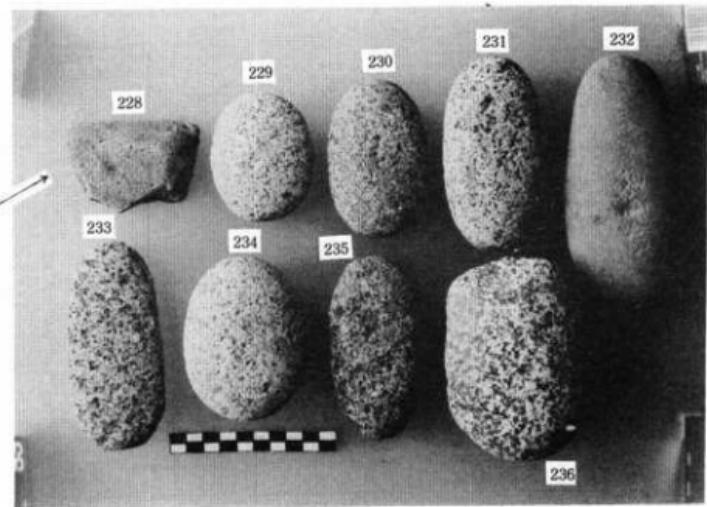
S P · L10



〔タタキ石〕

〔その1〕

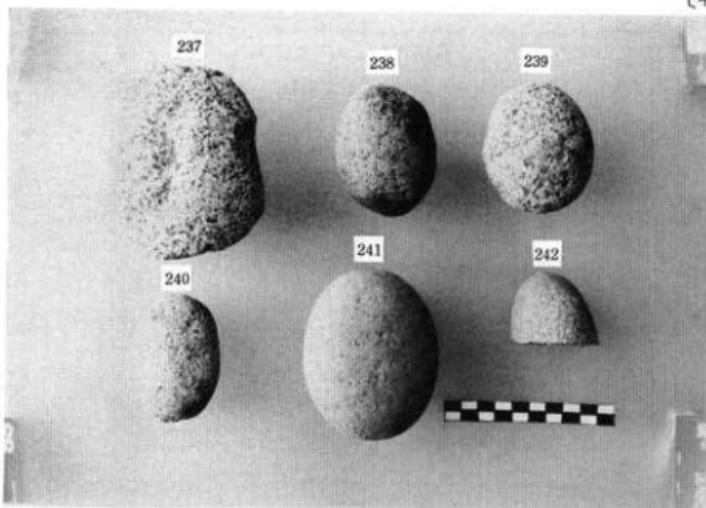
(土師器第二型式に伴うものである。)



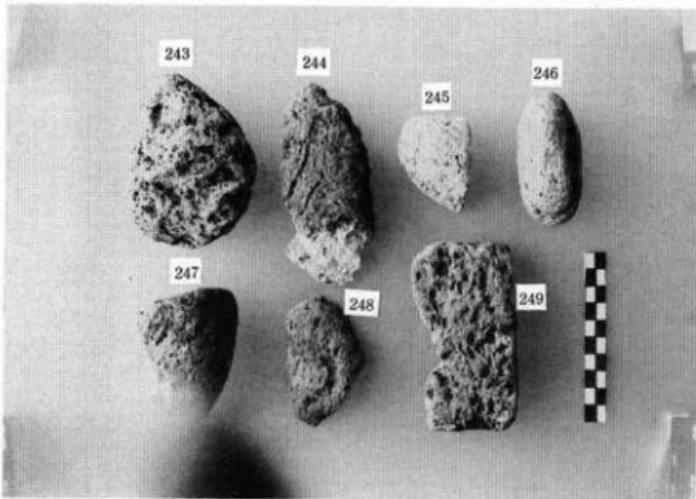
[タタキ石]

S P · L11

[その2]



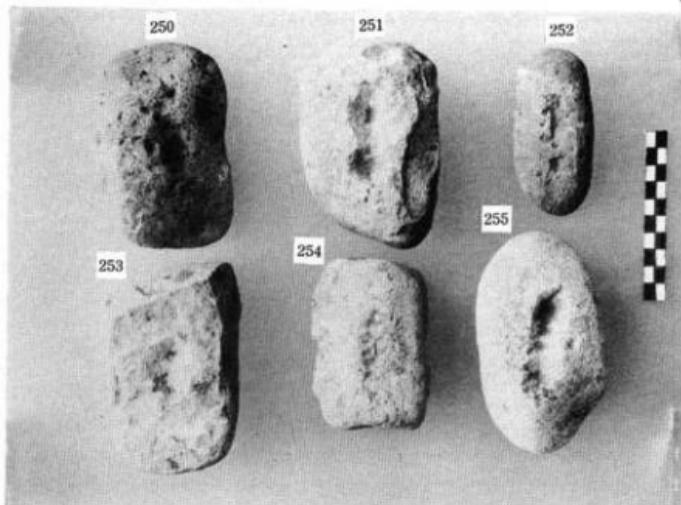
[怪石製品]



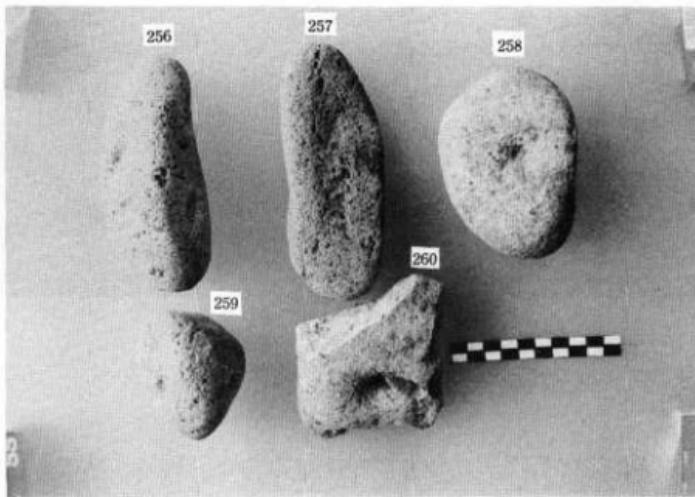
〔クボミ石〕

S P • L12

〔その 1〕

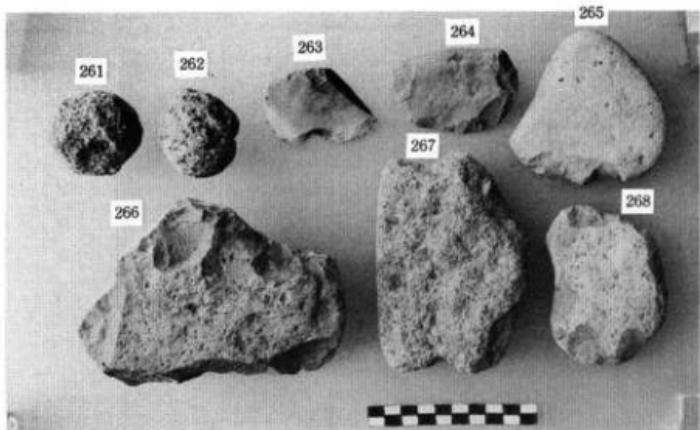


〔その 2〕

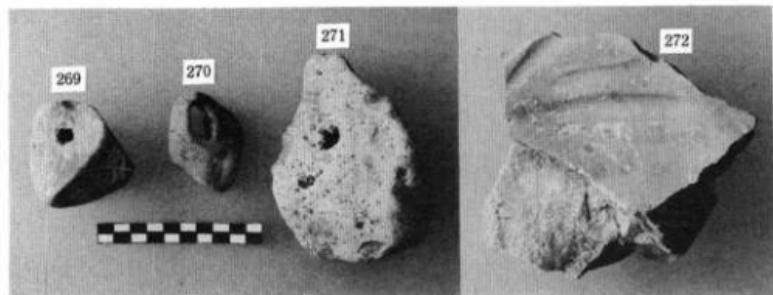


〔石弾・抉入石器・橢円形扁平石器〕（鉈状石器を含む）

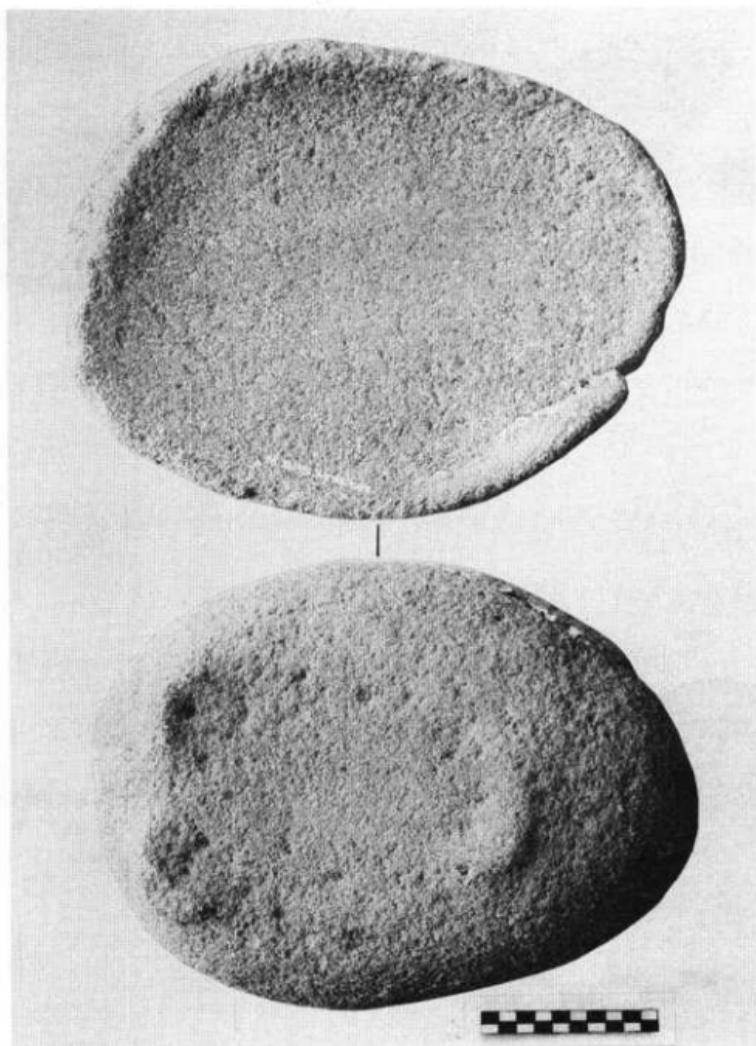
S P • L13



〔穿孔石・溝状擦痕のある石器〕



273 a



273 b

〔石皿〕

S P • L15

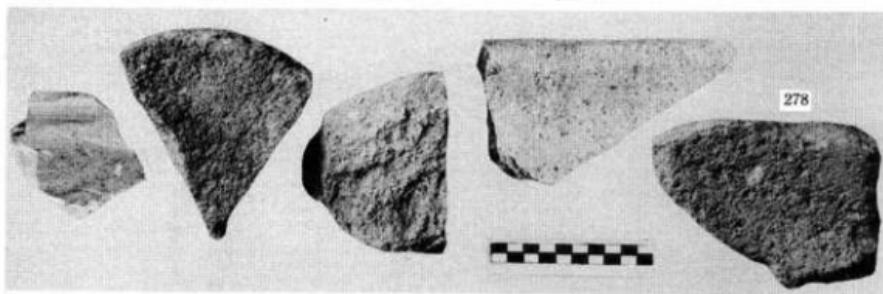
274

275

276

277

278



〔石錐〕

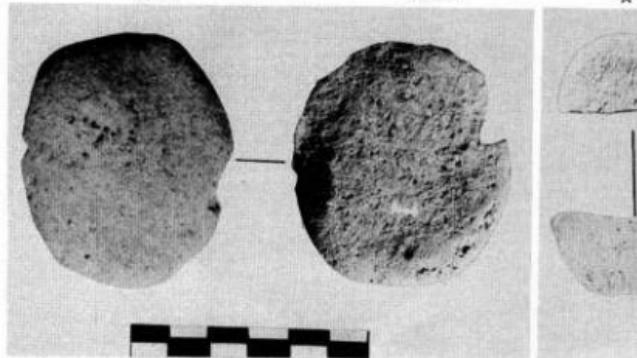
279 a

279 b

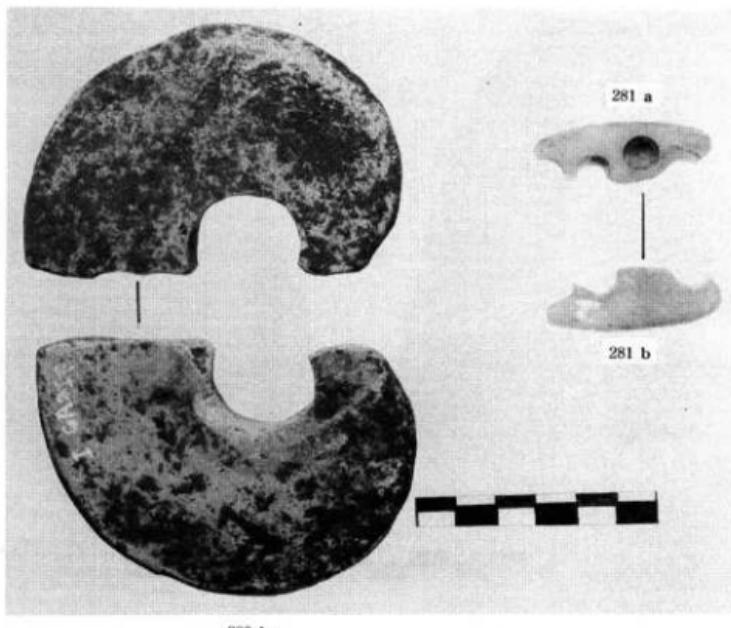
☆

垂飾品？

表裏とも擦痕があり
(縦位)、側面も整
形されている

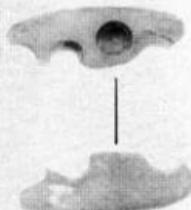


280 a



280 b

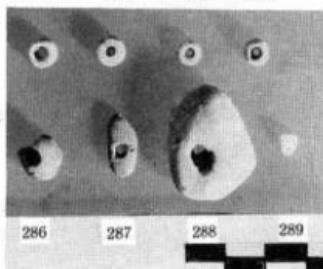
281 a



281 b

〔小玉類〕

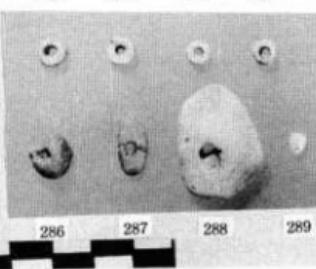
282 283 284 285



a

— b —

282 283 284 285



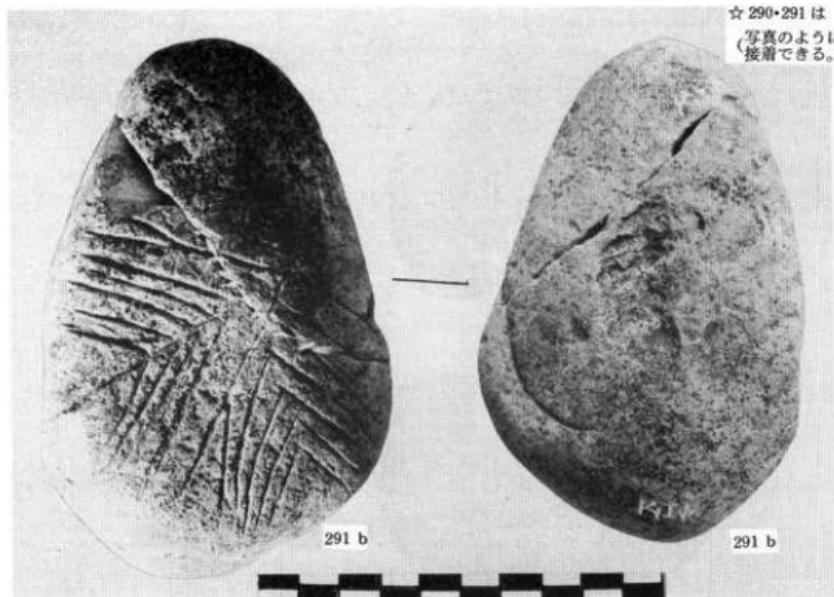
286 287 288 289

〔線刻石〕

S P • L17

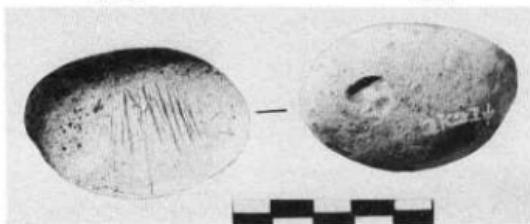
290 a

290 b



292 a

292 b



〔鉄製品〕

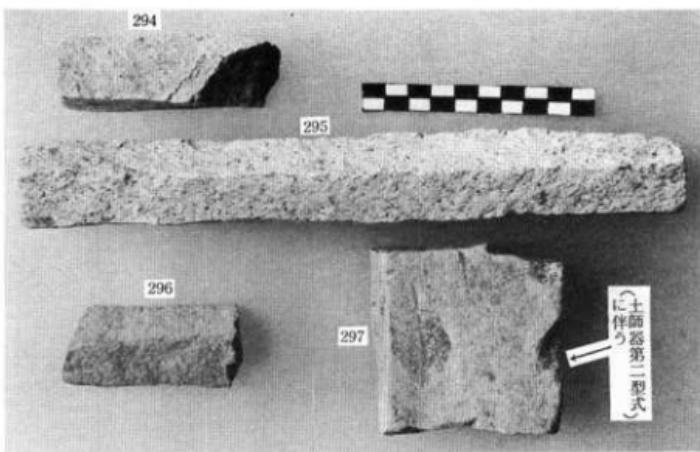
293



☆ 293 の
用途・機能・形状等不明
である。

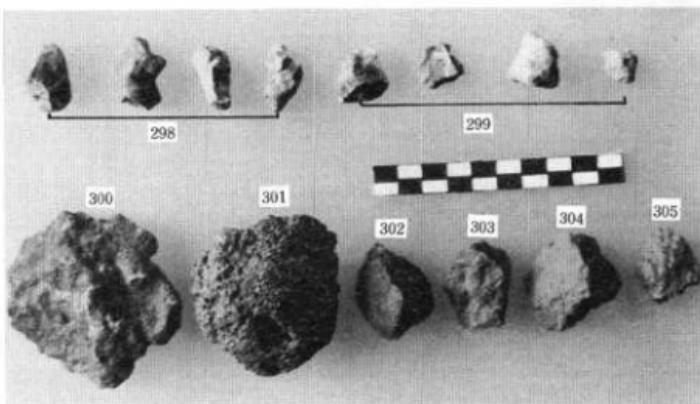
〔柱状石等〕

〔その 1〕



〔緑色原石・自然石等〕

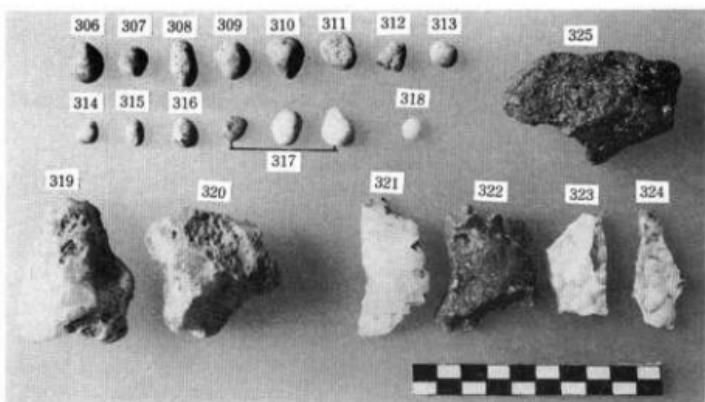
〔その 2〕



〔緑色原石・自然石・鉱石等〕

S P · L19

〔その3〕



〔植物等〕

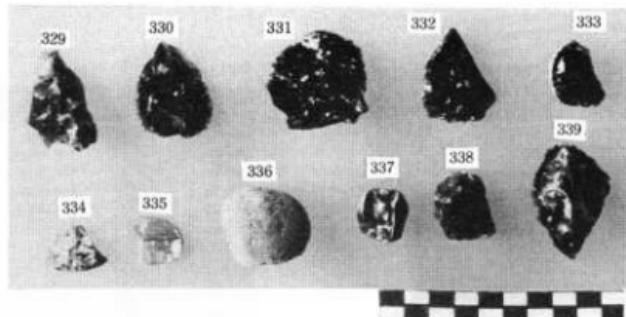


〔黒曜石・木炭〕

S P · L20

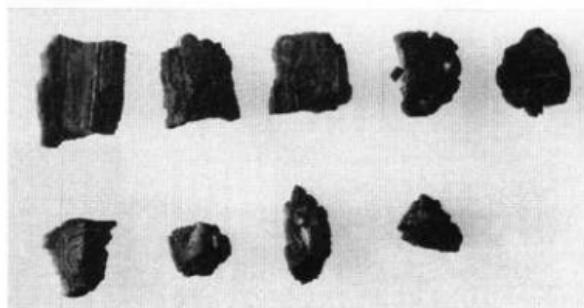
〔その4〕

(黒曜石)

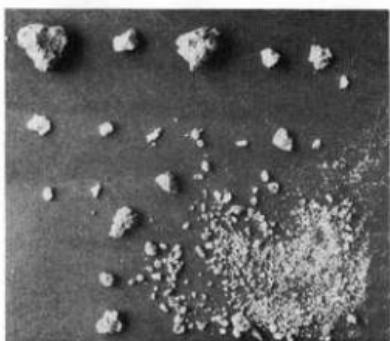


(木炭)

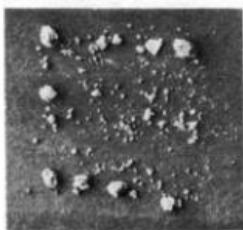
〔340〕



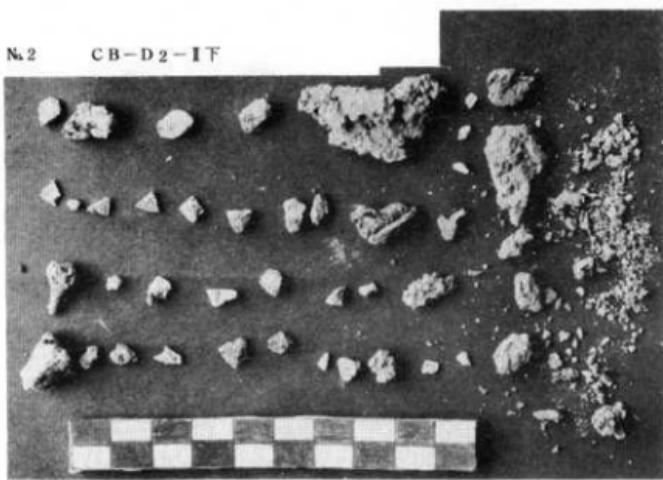
No. 1 AK 2 - II



No. 3 AK 1 - II



No. 2 CB - D 2 - II 下



〔骨片類〕

B P • L 2

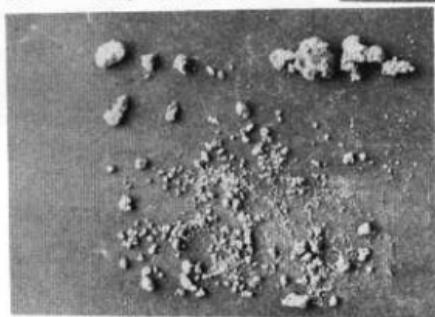
〔その2〕

No. 4

C A - B 1 - II 下



No. 5 AK 1 - II 下 (焼土内)



A J 1 - II 下

No. 6

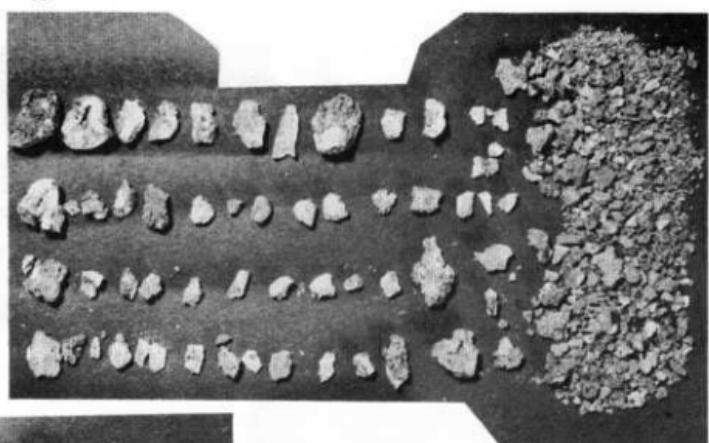


〔骨片類〕

B P · L 3

資 N_o 7

〔その3〕



資 N_o 8

A J 2 - II 下 (北壁下)



A K 1 - II 上 (ローム上)

資 N_o 9



A K 2 - II 上 (ローム上)

〔骨片類〕

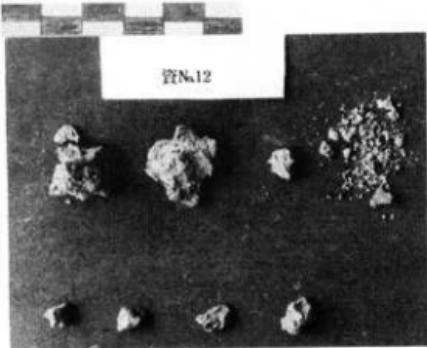
B P · L 4

K 2 - II 上 (ローム上)

〔その4〕



AK 2 - II 下



C A - B 1 - II 中
(四脚壺)

〔骨片類〕

B P + L 5

〔その 5〕

No.13



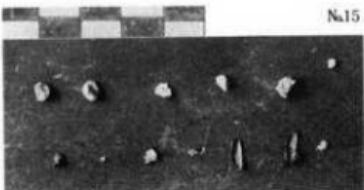
A J 1 - II 中

No.14



C A - A 1 - II

No.15



C A - A 1 - II

☆参考文献

- ① 観音林遺跡 (1973・1984・1985・1986)
五所川原市教育委員会
- ② 五月女泡遺跡 (1983) 市浦村教育委員会
- ③ 亀ヶ岡式土器 (1984) 村越潔 ニューサイエンス社
- ④ 「白坂」 (1983) 山岸英夫 北海道松前町教育委員会
- ⑤ 北奥の古代文化 (1975) 平山久夫編 学生社刊
- ⑥ 亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書
(1974) 青森県教育委員会
- ⑦ 青森県考古学 (1984) 青森県考古学会

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集

観音林遺跡（第五次）

○発行年月日 昭和62年3月31日

○発行者 青森県五所川原市教育委員会

代表 教育長 高橋清徳

住所 五所川原市岩木町12番地

○著者 新谷雄藏

川村真一

○印刷所 徳小野一印刷

